

西南学院大学 図書館報

私がすすめるこの一冊

堺 太郎・白石善章・小山雅亀ほか……	2～4
フェア、ケア、シェアの国アメリカ…福田 靖	5
司書補講習受講雑感……	川上由美子 6
気楽に読める専門書〈5〉……	古屋靖二 7
お知らせ・報告……	8



英語以外の外国語学習の勧め

経済学部教授 吾郷 健 二

のっけから私事で恐縮だが、最近、五十路を前にして、韓国語（朝鮮語）の勉強を始めることになった。多忙を口実に予習・復習をしないで唯出席するのみだから、クラスの最劣等生であり、先生に相済まない次第であるが、それでも試験無し・単位無しだから、楽しく勉強させていただいている。

そこでの言語学非専門家の感想（反省？）。

1. 語学を始めるには若い時ほど良い。
 2. 毎日（短時間でも）、予習・復習するが良い。（これが、易しいうで難しい。2・3日or1週間or1ヶ月休んだからといって、諦めてしまわないで、また再開するとよいようだ。）
 3. 文法構造が日本語と全く同じ言語が日本語以外にもあると知るのはちょっとしたショック。
 4. 特に敬語の使い方を通して、韓国（朝鮮）文化入門となった。異文化を知ることは、自身を相対化し、豊かにさせてくれる。
 5. 発音については、日本語風で聞き直つてよい。（上手にできる人は本格的な発音であることが勿論望ましいが。）
- ところで、世界には、言うまでもなく、英語以外に何千という言語があり、主要なものだけでも何十とある。国連公用語に限っても、私の知る限り、英・仏・中・スペイン語・ロシア語とある（もっと増えているかも？）。異なる言

語を学ぶことは、その言語を話している人々の風土、文化、観念、気質、宗教、歴史などに触れ、それらに教えられるということであり、それは、学ぶ人を驚ろかせ、興奮させると共に、楽しくさせ、豊かにしてくれる。

数多い言語の中には、日本人である私達にとって、とっつきやすいものもあれば、とっつきにくいものもある。例えば、スペイン語は前者の典型例と言える。外国語学習の最大の難点（の1つ）である発音が日本人にとってきわめて容易だからである。フリオ・イグレシアスの歌詞の意味が分るのは、嬉しい。

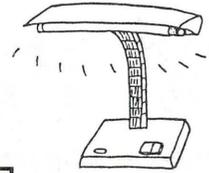
「語学の西南」といい、「文科系総合大学」という本学に英・独・仏・中以外の外国語科目が開設されていないのは、大学の怠慢以外の何物でもないが、学ぶ方法が全くないわけでは勿論ない。今の世の中は、独習がし易い環境になっているのだから。

学生諸君には本学に開設されている科目だけでなく、他の言語（ハンブルグ、スペイン語、ロシア語、……）にどんどん意欲的に挑戦してもらいたいと願う。思いもかけない世界がそこに待ちうけており、視野が急に開けて、自分自身が一段と成長したように感じることに、請け合いである。

（あごう けんじ：世界経済論）

読書の秋

私がすすめるこの1冊



『大草原の小さな家』

ローラ・インガルス・ワイルダー著

文学部教授 堺 太郎

この7月、私達一家が帰国する直前、親友のクリングマン一家があわただしげに、お別れの言葉を述べるためにわが家に立ち寄った。聞くと今からコロラドへ2週間のキャンプに行くという。今年は小学生の2人のお嬢さんの外に、1月生まれの子がいます。「赤ん坊がいるからこそ、今年も又キャンプに行く」という。

私は彼等の中にこの本の作者ローラ一家の姿をだぶらせてみた。大自然の中に身をおかれた時、家族は必然的に助け合う。生活の知恵や工夫が生まれ、また大自然の脅威や豊かさを体験する。そこには我々が日常生活では考えられないさまざまな体験がある。キャンプをおえた彼等は、より一層家族の絆を深めたであろう。

去年、アーカンソー州のある美術館でみた一枚の絵が、今も私をとらえている。インディアンの親子が吹きすさぶ砂嵐の中、手を取り合い、住みなれた土地をじっと涙のまなざしで、振り返って見ている絵である。この絵には「涙の旅」という題がつけられていた。西部開拓の歴史はインディアンの涙の歴史でもある。

西部開拓の歴史やアメリカの家族のこと等を知る上で、この本を読むことをおすすめする。なぜならローラ一家の精神が今もアメリカの家族の中に生きつづけているからである。学生諸君には原文で、また先生や職員の方々には、ご家族で読まれる事をおすすめする。

(さかい たろう：社会福祉)

『「豊かさ」の貧困』

ポール・L・ワクテル著
土屋 政雄 訳

商学部教授 白石 善章

昔から「衣食足りて礼節を知る」という言葉がある。物的な満足があつてこそ、精神的な高揚があるということだろうか。

現代の私達の生活は、物的な面では、かつてない程に豊かになった。それに伴って私達の心も豊かになっただろうか。

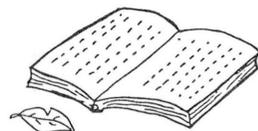
かつて、父は旅先で迷い、全く見知らぬところで泊めてもらった経験をもった。私が学生の頃、夕ぐれ時に国鉄の駅舎にたむろする多くの浮浪者がいた。彼らはみんな、どこかで拾った新聞や雑誌を僅かな灯りを求めて、むさぼり読み相互にそれを交換していた。その光景を見た私は、日本の復興と繁栄を予感した。

最近はどうであろうか。寒空にふるえる迷い子を、たとえ一時的にしろ、家庭で保護してはいけないといわれる。飽食の今、物は使い捨てられ、顧みられることもない。いじめの横行や弱者につけ込む悪徳商法のはびこりは後を断たない。物的な豊かさととは全く関係なく、私達の精神的な貧しさは増加しているように思われる。これこそ「豊かさの貧困」の問題である。本書は「豊かさ」と「幸せ」の論理が全く別であることを数多くの例をあげて解明している。是非一読して「経済活動と倫理は背を向け合う」という命題が虚偽であることを証明していこう。

(しらいし よしあき：商業政策)

読書の秋

私がすすめるこの1冊



『ペリー・メイスン・吠える犬』

E・S・ガードナー著
(小西宏訳・創元推理文庫)

法学部助教授 小山雅亀

近年、法廷を舞台とする「推理小説」は数多い。しかし、日本のものはおおむねおもしろさに欠ける。その理由の一つは、我国の刑事裁判が陪審制を採用していないためであろう。

いうまでもなく、陪審制とは、一般市民から選ばれた12人の陪審員が有罪・無罪の判断を下す制度で、英米の他、多くの西欧諸国がこれを採用している。この制度の下では、検察官、弁護人ともに素人を説得しなければならず、公判廷はわかり易いものとなる（一度でも日本の刑事裁判を傍聴すれば、その専門家性とわかりにくさに驚かされるであろう）。

法廷を舞台とする推理小説のうち、最も著名でかつおもしろいものとして「ペリー・メイスン・シリーズ」を挙げることに、おそらく誰も異論はあるまい。ただ、このシリーズの多くは、陪審が関与する以前の段階である予備審問（身柄拘束継続の適否を審査する制度で、我国には存在しない）を舞台としており、陪審の面前でメイスンが活躍するものは意外に少ない。数あるメイスン・シリーズ（駄作と言えるものもないわけではないが、すべてそれなりにおもしろい）のうち、陪審の面前を舞台とする作品をあえて一つ選ぶとすれば、上記の一冊であろう。弁護士の主人公、秘書、私立探偵の三人組の活躍は、いつもながら爽快感を伴う。

なお、我国も陪審制を採用したことがあり（昭和3～18年）、現在も停止中であるにすぎず、沖縄では最近まで存在していた（ここを舞台とするすぐれた作品として、伊佐千尋「逆転」がある）ことを付言しておきたい。

(こやま まさき：刑法・刑事訴訟法)

『沈黙』

遠藤 周作著

樋口達也

私は、この小説を読んで、以前から漠然といただいていた、神の存在に対する疑問について再認識させられました。

キリスト教を禁止した、鎖国日本に潜入したポルトガル人のロドリゴ神父は、信者が拷問を受けて死んで行くのを見て、一つの疑問をいただきます。「なぜ神は熱心で純粋な信者たちが、虫けらのように殺されるのを黙ってほっておかれるのか」この神の沈黙に対する疑問は、私が宗教について考える時いつもぶつかる壁でしたので、共感して読み続けました。やがてロドリゴ神父も捕まり棄教を迫られます。そして自分のために他の信者が殺されるのを見て「もし万一神がいなかったとしたら、彼らの死はなんと滑稽な劇であろうか」と怖ろしい想像が浮かんできます。しかし、棄教を拒み続けますが、最後には踏み絵に足をかけます。その時踏み絵のキリストが彼に語りかけます。何を語りかけたかは是非この小説を読んで体験してください。そこには、遠藤周作氏の抱くイエス像、病を癒やす等の奇跡は行なえなかったが、人々から見はなされた癩病人や悲しんでいる人々の手をにぎって伴に苦しめられた、愛の神の表現を見る思いがしました。神の沈黙という宗教全体の大きな難問に正面から取り組んだ、わかりやすい本であり、興味を持たれた方は一読をおすすめします。

(ひぐち たつや：経理課)

読書の秋

私がすすめるこの1冊



『ガーブの世界』

ジョン・アーヴィング 著

文学部3年 因幡敏幸

文学部に籍を置く者としてはふさわしくないことかも知れないが、私の中には小説家という人種に対して抜きがたい偏見がある。世の中の苦勞をひとり背負っているような顔をし、鼻持ちならない自意識、うんざりするようなセンチメンタリズム、あきれ返るようなナルシズムを後生大事にかかえこみ、懸垂の1回も100mダッシュもできない脆弱な肉体をし、そのくせやたらと言葉で武装したがる、という偏見が。

しかし、ここにそれを一蹴する小説家がいる。ジョン・アーヴィングだ。彼が書いた「ガーブの世界」は腕力のこもった小説だ。思いもつかない設定、展開に私たちはグイグイ引き込まれる。どこにでもありそうな世界と、とうていありそうには思えない世界が渾然一体となり、奇妙なりアリティーを生んでいる。読者に振り回される小説が横溢する昨今、これほど読者を振り回す小説も珍しい。私たちは、ハンマー投げのハンマーのように容赦なく振り回され、小説の新概念へと投げ飛ばされる。

アーヴィングの写真を見ると、なかなか不敵な面構えをしている。彼はレスリングを得意とし、オリンピック代表選手にもなろうとしたらしい。小説を書こうとする者は、こうでなくてはならない。

(いなば としゆき：英文学科)

『赤糸で縫いとじられた物語』

寺山修司 著

法学部2年 染谷比呂子

「彼」は永遠の少年でした。

透き通ったガラスのような感性を持ち続けた人だったのでしょ。

「彼」は、突然ぼっかりと心に空洞ができてどうしようもなくなることがある私の冷くなった心に、ふっと入りこんで、そっと慰めていてくれます。私はまだ、たった20年しか生きていないけれど、その中で喜び、悲しみ、怒り、愛し、憎むことを覚えました。そしていつしか物事に対して、自分が真っ白なキャンバスであることを忘れてしまっていたような気がします。「彼」の文章は、そんな私に、海が青いことを思い出させてくれるし、空が限りないことを改めて気付かせてくれるのです。

「彼」はいつも青春を生きた人でした。「彼」は、或る時は星の王子さまのように、そして或る時はアリスのように、「大人」であるはずの自分が、こんなにも自由に駆け回ることができると感付かせてくれるのです。

「彼」の作品は、「大人」である人にこそ触れて欲しい。「孤独」だと思う人にこそ、手にとって欲しいのです。なぜなら「彼」はきっとそんな人たちが忘れていた“何か”を思い出させてくれるはずだから。

消しゴムがかなしいのは

いつも何か消してゆくだけで

だんだんと多くのものが失われてゆき

決して

ふえるということがないということです

(そめたに ひろこ：法律学科)

フェア、ケア、シェアの国アメリカ

文学部教授 福田 靖

USC (University of Southern California) の図書館は本館(Doheny Memorial Library)と16の分館から成り、蔵書数は200万を越えている。本館にはmain stacksの他にRare Books, Cinema, International Documents, Oriental (中・韓・日)などの特別コレクション、閲覧室、大学習室、学位論文作成者用個人研究室、それに全体を管理する事務室、ホストコンピューターなどがある。各ブランチ・ライブラリーはそれぞれの学部と同じビルあるいはその近くにあるので、学生も教授も利用し易いようになっている。図書の帯出、返却はIDカードの番号とバーコードを使って迅速に処理された。

検索方法として通常のカードの他に「USC雑誌総合目録」が各所に備えられている。便利だったので私がよく利用したのはオンライン・カタログというシステムで、各分館にある端末機のキーをたたいてUSC全館内の本を捜すことができる。これを使えば必要な本がどの館のどのあたりにどんな番号で配架されているとか帯出中かどうか等がすぐにわかる。このデータベースにはUSC所蔵図書数の50%以上、最近15年以内に入った図書に関しては95%がインプットされているという。しかもこのカタログは学内全オフィスをオンライン化しているHomerのコンピューター端末機からもアクセスできるようになっている。各図書館の利用可能時間は一定ではないが、早い所は朝7時45分には開き、遅い所は深夜12時まで、それに日曜日も開いているところがある。

図書館に限らず、オフィスや教室も夜遅くまで明かりがついている。その時間まで学ぶ学生や働く教職員がいて、大学の施設と機能をフルに活用していることを意味するが、食事のメニューと同じようにライフスタイルそのもののchoiceを好むこの国だからこそ可能なことでもあり、日本のような画一的な社会では当然実現しそうにない。

Business Libraryに行かない時はBusiness Communication 学科の研究室で過ごした。と

言っても指導教授のG先生の室に、彼の個人的厚意により、1年間居候(平等社会ではshareだと言う。ついでに内縁も不倫も英語では生活をshareしているに過ぎない。)させてもらったのだが、電話、タイプライター、蔵書、秘書まで利用できて大いに助かった。J秘書嬢のそばにはいつでも飲める熱いコーヒーがあった。カフェテリアで手焼きのクッキーを買い、静かな研究室で一人紙コップのコーヒーをすすりながら本を読む。ここでは始業のベルも会議の時間も気にしなくてよい。これ以上の恵まれた時は生涯再び得られないかも知れないと在外研究の有難さが身にしみた。G教授の授業は昼間、H教授の授業は夜8時からであったが、学生たちは、日本はfairでないとか何とか、いずれも声高に自己を主張する。voice of America は放送だけでなく、日常生活の到る所で聞える。

週末やまとまった休暇の時はよくドライブ旅行を楽しんだ。目の前のフリーウェイが一直線に天まで続いている中をひた走るのには実に壮快であった。ただ車の楽しみにはそれなりのコストがかかるものである。ありとあらゆるcar care用品が店頭を飾り、修理業者、保険会社、弁護士までがドライバーのcareのためにビジネスを売り込もうとする。ほかにも美容、健康、医療、保険、家の補修、防犯などはすべてcareの対象としてビジネス・チャンスを狙われていることは毎日の夥しい量のjunk mailを見ても明らかである。

1年間の研究成果は、と聞かれると返事に窮するが、いくつかの言葉についてその社会的背景が少し解ったような気がする。要するに、アメリカ人は声(voice)高く自己主張をし、常にchoiceが用意されることを不可欠な生活基盤とする。さらにfair, care, shareに大きな価値観をいだいている国民ではないか。それが限られた経験に基づく印象であった。— Was it you, Yasushi, that studied abroad last year? Yes, it's U.S.C.

(ふくだ やすし：商業英語)

司書補講習 受講雑感



川上 由美子

私は、7月20日から8月28日まで約40日間、別府大学で実施された司書補講習に参加した。11科目15単位取得する必要がある、1科目講義が終了する毎に、試験かレポート提出が課せられた。真面目に受講をすれば、合格しない人はほとんどいず（点数が悪ければ、追試がある）、たいていの人はライセンスを取ることが出来た。

受講のきっかけは、図書館内で今年夏期に行なわれる司書及び司書補講習受講者の募集が行なわれたことだった。確か応募の〆切日は6月13日（土曜日）だったと思う。今年の夏こそ、カナダに行こうと決心をしていた。英会話を週一回の割合で習っていたのだが、勉強はほとんどせず習っていたので、上達の見込みがなく、自分に刺激を与える為に、現地で語学研修を受けようと思ったのだ。それで、初めは司書補講習のことは気になってはいたが、受講など考えてはいなかった。しかしどうしたはずみか〆切日の土曜日になって、図書館に働く以上役に立つにちがいないと急に思い、応募してしまった。結局、司書補講習を受講したことは、私にとってプラスとなった。そこで学んだことは実務者の私にとって簡単なこと、不必要なことも少なかつたが、他への興味を広げてくれた。論理とか定義をたいせつにする授業を受けていると今まで自分に論理性を大事にする習慣がないことに気づかされた。又、本を読むことの大切さ、自分を豊かにする必要性などを感じ、自己啓発の要素となった。

「図書館に働いていると本が読めていいね」とかよく聞く。いかにも“楽な仕事でいいね”と言っているようなフレーズである。しかし実際には、急ぐ仕事があっても、日に2度配架作業（貸出し後返却された図書や読まれた図書を元の位置に戻したり、新刊を所定の位置に置く作業）をしなければならないし、書棚が本で一杯になると移動作業を行なう。そうなるとカビと埃にまみれた作業となる。確かに図書館員は一般の人より本と接する機会が多いので、本を読む習慣がついてくるが、けっして楽な仕事ではない。

もし“司書”を志されているならば、語学力の必要性を言っておきたい。図書館には学校図書館・公共図書館・専門図書館・大学図書館などがあるが、大学図書館に勤務していると英語・仏語・独語だけでなく、母国語も大事なことに気づく。表現方法や文化など知らないことがいっぱいあるはずだ。しかし最初からパーフェクトに出来る人などいず、そんな事は徐々に覚えていけばよいと思うが、やはり基礎を身に付けた人にはかなわない。今の間に体力や教養を備えた人になってほしいと思う。そうすれば司書になれなくても、社会で通用する人物になっていると思う。今回の司書補講習受講は、私にこれまでとちがった観点を発見させてくれた。そのような体験をみんなが持てることを期待して筆を置くことにする。

（かわかみ ゆみこ：情報サービス課）

気楽に読める専門書〈5〉

『シェイクスピアの面白さ』

930
28S
2

文学部英文学科主任 古屋靖二

英文学科の学生にとって、シェイクスピア（以下Sh. と省略）については一度ならず講義を受けるか、作品を読まされるなどで親しむ機会を持っている。イギリス・ルネッサンスが生んだこの偉大な文豪が、いわば“英文学山脈の中の最高峰”として位置づけられていることは、英文学史の常識と言ってよい。しかしながら、Sh. が生きた時代が今から400年も遡り、や、古い英語で書かれた彼の原書鑑賞が並々ならぬ努力を要するために、学生達から敬遠されがちなこと事も事実のようだ。

Sh. の英語のむつかしさはともかくとして、英文学科の学生のみならず、他学部・学科の学生にとっても、文学、いや人生に興味を抱くならば、学生時代に一度は是非「万人の心」を持つと言われる“Sh. 山”の登頂を試みて欲しいものだが、そのために「気楽に読める専門書」があればどんなに助かるだろう。幸い「Sh. を語ってこれだけ面白かったものは、ほかにない」とある書評に言われる通り、中野好夫著『シェイクスピアの面白さ』（新潮選書、880円）は、文句なしに推薦できる本である。

「Sh. に近づく唯一の正しい第一歩は、Sh. の偉大さ、彼の作品の古典などという先入観を拭い去ることだ」と読者に語りかける本書は、Sh. に対する“気負い”を取り去ってくれる。出版当時、Sh. に親しみ熟読して40年になるという、英文学者、Sh. 翻訳家として著名であった中

野好夫氏が、Sh. 理解と鑑賞の正攻法を説きながら浮彫りにする Sh. 像は、学問的な専門家のための劇作家だけではなく、私達にとって身近な親しめる劇作家のイメージである。Sh. 劇が現代劇としても魅力をもち、人種や国籍の違いを超えた普遍性をもっていることが、日本の伝統演劇（能や歌舞伎など）との共通性が比較文学、比較文化の観点から言及されながら、具体的に語られる。Sh. の言葉の面白さ、劇的技巧の急所、人間研究の秘密（特に「あまのじゃく精神」や「無用の好奇心」）などが、Sh. の伝記や人となり、彼の生きた時代相、エリザベス朝の劇場と舞台、俳優の実情、Sh. の悲劇と喜劇の特質など、Sh. 理解に欠かすことのできない知識と共に語られる。

Sh. 関係の専門書は日本語によるものだけでも毎年数冊は出版されている現状だが、Sh. への正しいアプローチを教え、そして何よりもSh. の「面白さ」、つまり彼の不思議な魅力を気楽に語ってくれる本書は、Sh. を読んだことのない人には手頃で、しかも中身の濃い入門書となり、またある程度親しんでいる人には、さらに深く研究してみたいという意欲をかきたてる専門書でもある。私自身も Sh. に親しみ始めた頃、この本によって少なからず貴重なオリエンテーションを受け、Sh. 研究のエッセンスを学んだことをはっきりと記憶している。

（ふるや せいじ：文学部教授・イギリス文学）

お知らせ

○大学祭期間中の開館

11月11日(水)～14日(土)

9:00～21:00

※この間1階学習室は閉室

○冬季休暇中の開館時間および休館日

12月25日(金) クリスマス休館

26日(土) 9:00～12:00

28日(月) } 年末年始休館

1月5日(火) }

6日(水) } 9:00～21:00

7日(木) }

※この間1階学習室は閉室

(1月8日より平常通り開館)

○冬季休暇中の長期貸出

(下記対象以外は除く)

学部学生、専攻科生

12月15日(火)～1月7日(木) 5冊以内

留学生別科学生

12月15日(火)～1月7日(木) 10冊以内

大学院生

10月26日(月)～11月18日(水) 20冊以内

いずれも返却期限は1月18日(月)

○卒業年次生へ

卒論用に別途3冊(1ヵ月)貸出中

卒業生(82期生まで)の卒論閲覧可能

(詳細は受付まで)

○昭和62年度第6回電算機事務処理利用研修会

62.7.22～24 於:熱海市

有森司書出席

○昭和62年度私立大学図書館協会総大会・研究会

62.7.30～8.1 於:鶴見大学

刀根事務次長、今永課長出席

○昭和62年度九州地区著作権講習会

62.9.17,18 於:熊本市

大羽司書出席

○昭和62年度私立大学図書館協会秋季西部地区部会

62.10.2 於:北九州市

田代課長補佐、坂口司書、渡辺司書出席

＜本学開催の研究会等＞

○第2回九州E.C研究会

去る7月4日(土)に、本学の学術研究所において、星野郁氏(九州大学)「経済結合と資本移動」、高瀬泰之氏(熊本商科大学)「イタリアにおける国家持株会社の最近の動向について」の研究発表があった。出席者24名。

○昭和62年度図書館実習

7月6日から18日までの2週間、福岡女子短期大学の学生5名が、本学図書館において教育実習を行った。

＜人事異動＞

62.7.1付

田代二三生 (語学ラボラトリー事務室より) 整理課へ

瀧本孝子 (教務課より) 整理課和漢書整理係へ

荒川 勇 (整理課和漢書整理係より) 語学ラボラトリー事務室へ

平田美鳥 (整理課和漢書整理係より) 国際交流事務室へ

62.10.1付

江頭きよみ (庶務課より) 整理課和漢書整理係へ

山下由紀子 (整理課和漢書整理係より) 情報サービス課資料係へ

田中みえ (情報サービス課資料係より) 語学ラボラトリー事務室へ

☆ 報 告 ☆

＜図書館委員会＞

62.6.25 ① ファックスの設置とその利用について

② 学術情報センターの情報検索サービスについて

62.7.2 ① 図書館業務電算化の進捗状況について

＜研修・出張＞

○昭和62年度文部省委嘱図書館司書補講習

62.7.20～8.28 於:別府大学

川上司書補受講